



「ズ」当地アイドルの打算」

会いに行けるどころか、お祭り広場のステージ後でお話だってできてしまうご当地アイドル。本人たちは明日のトップアイドルを目指しているが、周りはなかなかそうは見えてくれない。焦るアイドルの心の支えは、熱狂的なファンの存在だった。どうやら彼はお金持ちのようで……。




わぁ、今日も来てくれたんだ、ありがとう！
私がどこでライブやってても絶対来てくれるよね。
うれしいな、いちばん熱心に応援してくれて。
観客が少ないって？ しょうがないよ。
私、マイナーなご当地アイドルだもん。
でもドームでライブやるまで、頑張るからね！
貴男もずっと応援してね！

……え、分かる？ 強がってるのが。
そりゃそうよ……惨めなものよ、私なんて。
本物の人気アイドルより下に見られて、
地元のお祭りくらいにしか呼ばれなくて。
いつも「その辺のお姉ちゃん」扱い……。
え、「僕がどうにかしてあげるよ」って？



え、貴男ってそんなにお金持ちなの？
ごめんなさい、いつもそんな格好してるから。
あ、あの、よかつたら、
私のスポンサーになってくれないかな？
いつもね、ライブと並行して協賛を探してて、
正直、もう疲れちゃってるんだ……。

あ、貴男が私のスポンサーになってくれたら、
そんな営業活動もしなくていいし、
私きつと、貴男のためだけに歌えると思うの。
ううん、歌うだけじゃなくって、
それ以上のことだって……。



ああっ、もっと、もっと激しくしてください。
ご当地アイドル娘のオマン×コを楽しんで！
私の体、好きにしていいいんですよ。
お金を出してくれるんなら、この体を弄んでも。
だって、マイナーアイドルって辛いんですもの。
行った先で枕営業ばかりさせられて……。

貴男がスポンサーになってくれれば、
もうそんなことしなくても済むんです。
移動売春婦みたいな生活から抜け出せるの。
だから、ほら、ガンガンに突いて。楽しんで。
体をあげるから、スポンサーになってえ……。